



HIV、20代は過去最多 平成27年5月27日時事通信

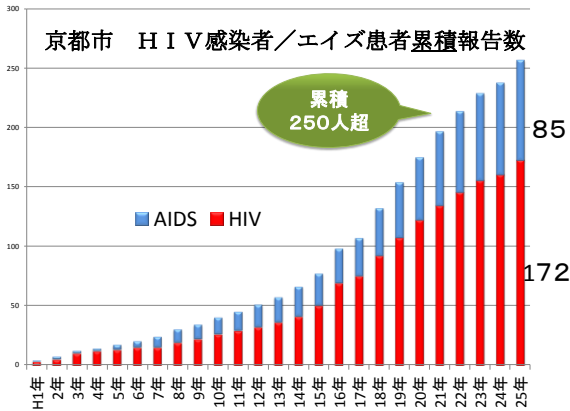
厚生労働省は27日、2014年に新たに報告された20代のエイズウイルス(HIV)感染者は349人で、過去最多だったと発表した。同省エイズ動向委員会の岩本愛吉委員長は「10代に向けたエイズに関する知識の普及啓発が、不足している可能性がある」と指摘した。

同省によると、14年の1年間に報告された感染者は1091人で、検査を受けないままエイズを発症した患者は455人だった。いずれも08年以降、横ばいが続いている。

感染者のうち、20代は349人で統計を取り始めた1985年以降で最も多かった。20代の感染者数が30代(347人)を上回ったのも12年ぶりという。

エイズを発症した地域別の患者数は、全体の約2割を占める東京都など都市部に多いが、罹患(りかん)率(11位が沖縄県、2位は福井県だった)。

岩本委員長は「沖縄県は外国人観光客の多さなどが考えられるが、福井県が上位に入る要因は分からない」と述べ、分析が必要だとした。

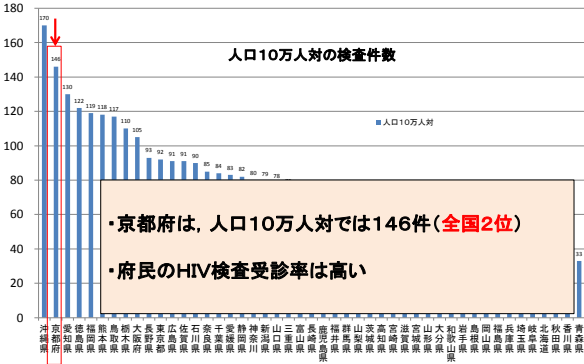


京都市のHIV感染者・エイズ患者の感染経路別、及び年齢別人数 (平成26年までの累計)

20代～40代の働く世代が中心

性別	男性				女性				計
感染経路 年齢	その他・不明	異性間性的接触	同性間性的接触	小計	その他・不明	異性間性的接触	同性間性的接触	小計	
20歳未満	1	0	0	1	0	0	0	0	1
20～29	11	11	37	59	0	4	0	4	63
30～39	17	34	50	101	8	2	0	10	111
40～49	19	17	17	53	1	4	0	5	58
50～59	8	7	11	26	0	2	0	2	28
60歳以上	2	0	8	10	1	0	0	1	11
計	58	69	123	250	10	12	0	22	272

(全国)人口10万人あたりの都道府県別
HIV検査件数(2013年)



京都市HIV検査体制

	場 所	検査受付日時	検査項目	検査結果
予約不要				
平日検査	各保健センター (11箇所)	月～金曜日 9:00～17:00 の間で約2時間 (毎日いずれかの区で受 けられる)	HIV 性感染症検査 (クラミジア、淋菌、梅毒、 B・C型肝炎ウイルス)	2週間後
要予約				
夜間検査	下京保健センター	毎月 第2、第4木曜日 午後6時～7時半	HIV(迅速)	約1時間後
要予約				
土曜検査	(一財) 京都工場保健会	毎月 第1、第3土曜日 午後4時～6時	HIV(迅速)	約1時間後

すべて無料・匿名

6

京都市HIV検査受検者

(平成25年度京都市HIV検査アンケート)

性別

	男性 (人, %)		女性 (人, %)		性別不詳(人)	計(人)
全体	2,234	62.3	1,351	37.7	1	3,586

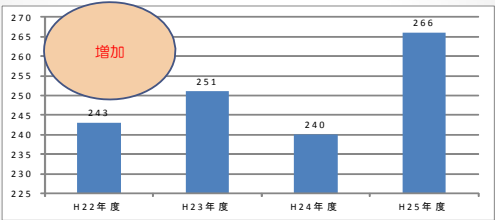
年齢

～19歳	20～29歳	30～39歳	40～49歳	50～59歳	60歳～	不詳	計
135	1,668	1,025	441	184	128	5	3,586
(3.8)	(46.5)	(28.6)	(12.3)	(5.1)	(3.6)	(0.1)	(100)

7

(平成25年度京都市HIV検査アンケート)

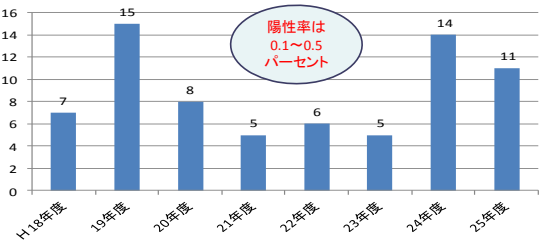
男性受検者で同性間の性的関係による
感染を心配する者の数(MSM)



	H22年度	H23年度	H24年度	H25年度
MSM	240	251	240	266
男性計	1,798	1,965	1,724	1,950
割合 (%)	13.3	12.8	13.9	13.6

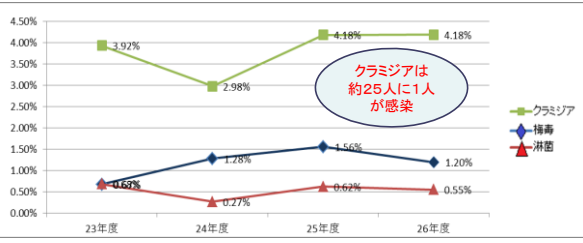
8

京都市HIV検査における陽性発見数



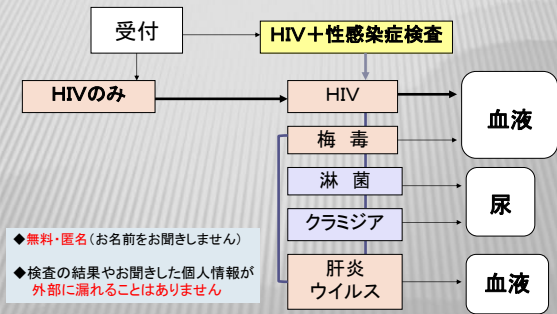
	H18年度	19年度	20年度	21年度	22年度	23年度	24年度	25年度
受検者数	1,517	2,674	3,368	2,913	3,009	3,245	3,192	3,586
陽性者数	7	15	8	5	6	5	14	11
陽性発見率	0.5%	0.6%	0.2%	0.2%	0.2%	0.2%	0.4%	0.3%

京都市性感染症検査における陽性率



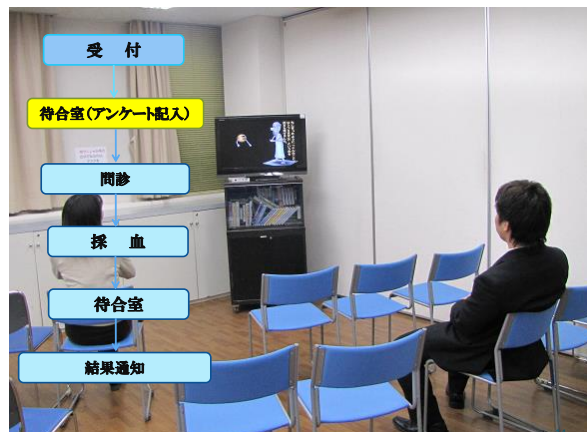
	23年度	24年度	25年度	26年度
梅毒	12	24	35	29
淋菌	12	5	14	13
クラミジア	69	55	94	99
検査件数	1,778	1,874	2,247	2,426

保健センターでの性感染症・HIV検査





13



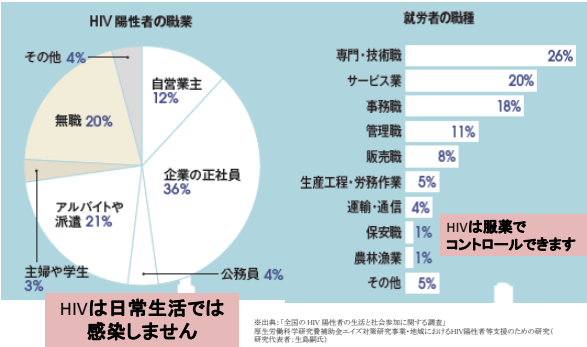
15



16



HIV陽性者の73%は就労しています



さいごに

- ◆現在、HIV陽性者は20代～40代の働く世代を中心に増加を続けている。
- ◆多くのHIV陽性者は、薬で症状をコントロールしながら、今までどおり働き続けることができる状態にあるにも関わらず、誤解や偏見を受けたり、離職に追い込まれたりといった現状がある。
- ◆社員は「HIV陽性になったら、働き続けることができないのでは」といった不安から、検査受検ができず、発見が遅れることもある。
- ◆企業にとっても、育成した人材を失うことは大きな損害であり、HIVに限らず、何らかの病気をもつ人にとって働きやすい職場であることは、誰もが働きやすい職場にもなる。